

本山彦一蒐集考古資料からみる本山彦一と 大正期の文人墨客との交流

渡 邊 貴 亮

はじめに

関西大学博物館では、2018年度春季特別展示会として2018年4月1日～2018年5月20日の期間、「やまもときやうざん山本竟山の書と学問－湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク」と題した展示会を、東西学術研究所の主導のもと開催した。本稿では、展示計画の際に新規に認識された本山彦一蒐集考古資料（以下本山コレクション）中の山本竟山寄贈資料について紹介するとともに、大正期の文人同士の交流について触れ、資料の来歴について若干の考察を行いたい。

本山彦一蒐集の石鉞

筆者は、上述の春季特別展示準備にかかるとともに、本山コレクションの再整理を行っていたところ、『本山考古室要録』⁽¹⁾および『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』⁽²⁾に「山本竟山氏寄贈」の文字を見出した。実物を確認したところ、中国浪渚文化に属する石鉞であった。

本資料は、紀元前3000年～2000年頃に、現在の中華人民共和国南東部の浙江省を中心とする地域に分布圈を持っていた浪渚文化に属する石鉞である。石鉞は有孔の斧形石器であり、石斧

との違いは柄に装着する際に、穿孔に紐を通して柄に縦向きに装着される。また、石鉞は、本来は武具としての機能を有しており、腰に装備していたと推測されている。

本資料は以前に写真及び計測データが公開されている⁽³⁾が、この機会にも図化及び写真撮影を行ったため、ここに改めて計測データとともに掲載する(図1・写真1・2)。計測値は、長さ14.79cm、最大幅10.98cm、最大厚1.25cm、孔内径3.64cm、孔外形4.1cm、重量372.99gである。

表面上部から左側縁上部にかけて敲打成形の痕跡を留める。剝離痕の末端部は研磨により不鮮明となっており、敲打成形後に研磨することによって製作されている(写真2上段左)。また、裏面右側には大きな剝離痕がみられる。落下などにより衝撃を受けて割れたようにも見えるが、剝離痕を観察すると剝離面内に研磨の痕跡がみられる(写真2上段右)。発掘資料ではないため製作に伴う痕跡とは断定できないが、この痕跡を積極的に評価するならば、成形敲打の失敗が製作中の事故により大きく欠損してしまい、その上から研磨して整形を試みた跡であるとも考えられる。



写真1 石鉞（縮尺2分の1）

穿孔部は「竹のような管状の工具で」孔をあける管鑽かんさんの技法を用いて穿孔されている⁽⁴⁾(写真2下段)。この方法で穿孔を行うには、表裏両面から寸分の狂いもなく同心円状の穿孔を行い、中央で貫通させなければならず、極めて高度な技術を要する。穿孔の単位は片面につき7～9回の単位が認められる。両面とも同じ様相を呈しており、表裏両面から同様の手順で穿孔を施している様が看取できる。この特徴的な中央穿孔部の内径・外径は、浙江省反山遺跡出土の石鉞に多くの類似資料が含まれる⁽⁵⁾。これらの点からも本資料が典型的な浪渚文化に属すると考えることが妥当であろう。

本資料の特徴として、石器両面の一部に朱の痕跡が遺存している。当初は他の本山コレクションにも残されている朱書きの一部が残存しているものかと考えていたが、朱の色調が他の資料と若干異なること、朱の痕跡が両面に残っていること、表面と裏面では痕跡の長軸が揃わないことなどから、本山コレクションに施された朱書きの痕跡ではなく、副葬に伴う朱の付着と判断した。本資料の石材は精良な玉質を呈しており、このことから実用品ではなく副葬品であったことが示唆される。

石器表面には「漢葯鏹」「山本竟山所贈」の

墨書がある。「鏹」は「さん」と読み、農具の鋤や工具の鑿、鉋の刃などをあらわす。また、地金を透くための工具にも用いられる文字である。当時の文人らの、石鉞に対する認識を垣間見ることができる資料である。これらの文字については残念ながら山本竟山の手によるものではない⁽⁶⁾。

本山彦一と山本竟山

本山彦一(1853-1932)、号は松蔭と称す。熊本藩士の子として熊本に生まれる。慶応義塾で学び、神戸師範学校長、藤田組支配人などを歴任した後、大阪毎日新聞社の社長となる。実業家、貴族院議員であると共に様々な文化への造詣が深く、富民協会の設立や農業博物館の設置、自身が蒐集した考古資料の展示施設として本山考古室を開設するなど、多方面で多くの業績を残した。

山本由定(1863-1934)、号は竟山・聾鳳と称す。日本近代の書家であり、日下部鳴鶴に師事し、楊守敬や呉昌碩らとも交流する。明治時代末には居を京都へ移し、関西においても多くの文人墨客と交流した。その中には、内藤湖南、富岡鉄斎、長尾雨山、羅振玉らの名が見られる。師の日下部鳴鶴は楊守敬との親交も深く、山本

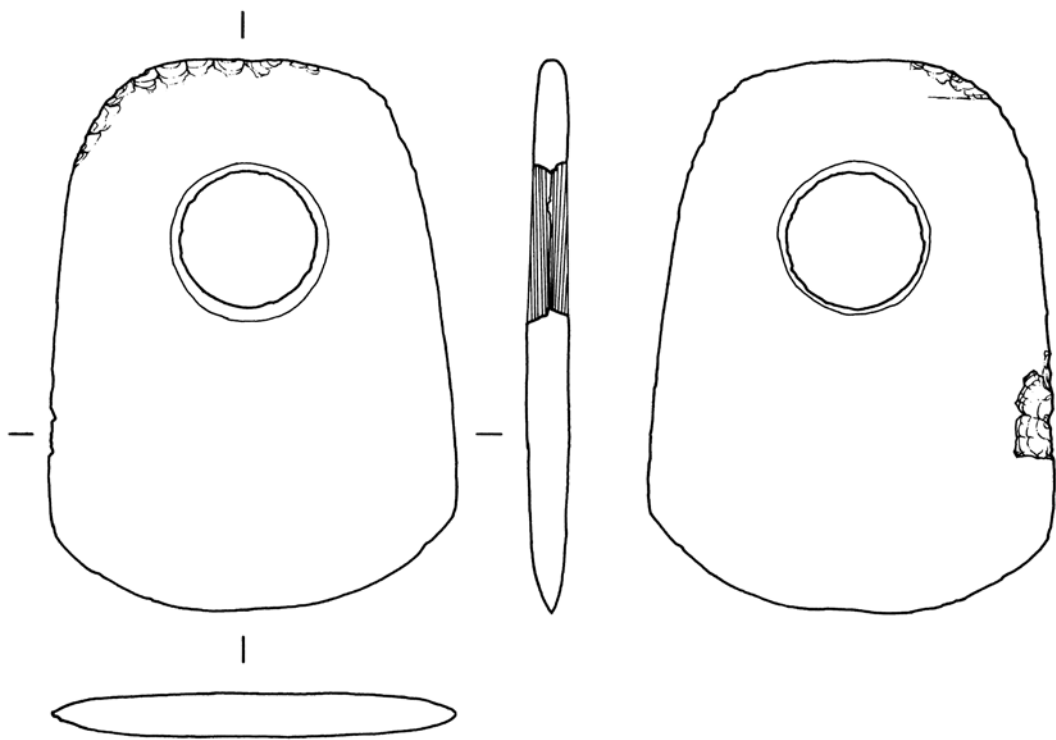


図1 石鉞実測図(縮尺2分の1)



写真2 各部拡大写真

竟山自身も中国へ遊学の際には楊守敬を訪問するなど深い親交を伺うことができる。

次に、本山彦一と山本竟山はどのような交流があったのかを見ていきたい。先述のように、山本竟山は墨客として京都に居を構え、多くの文人と交流を持っていたことが知られている。特に内藤湖南や富岡鉄斎・桃華、長尾雨山、狩野君山らとは頻繁に交流の記録がみられる⁽⁷⁾。1913年の大正癸丑蘭亭会、1916・1917・1918・1920年の寿蘇会、1922年の赤壁会などは、これらの交流から実現したものであろう。

このうち、1913年の大正癸丑蘭亭会では山本竟山と本山彦一が共に出品している⁽⁸⁾。また、第2回目にあたる1917年の大正丙辰寿蘇会には山本竟山と本山彦一が出席した記録がある⁽⁹⁾。さらに、1922年の赤壁会では発起人の名前の中に山本竟山と本山彦一の名前がみてとれる⁽¹⁰⁾。

このように、本山彦一と山本竟山とは直接的な交流の記録はほとんど残されていないものの、同じ雅会に出席し、さらには会の発起人を務めるなどしていることから、交流があったことはほぼ確実であろう。このような交流の中で山本竟山は、本山彦一が古物を蒐集している事を知り、自身のコレクションの中から石鉞を贈ったのではないだろうか。

山本竟山と石鉞

ここまで、山本竟山と本山彦一の交流をみてきた。次に、山本竟山の所蔵していた石鉞の来歴を考えてみたい。山本竟山が中国の器物を入手し得るルートはいくつか考えられる。主な可能性は①自身が中国に赴いた際に入手した、②人を介して入手した、の2つである。

では、①の直接入手はどうであろうか。山本竟山はその生涯で7度の中国訪問を果たしている⁽¹¹⁾。その中で直接石鉞を入手する事は、物理的には可能であっただろう。ただし、これらの訪中では主に書跡や碑帖を買い求めているようであり⁽¹²⁾、古物については入手した記録がほとんど残されていない。また、管見の限りでは、山本竟山は浙江省付近には訪れていないようである。

それでは、②の間接入手はどうであろうか。当時、日本国内で中国の文物、特に古物を所蔵している人物は極めて少なかったであろう。その中で、山本竟山との交流を見出せる人物では羅振玉が最も有力である。

羅振玉(1866-1940)、字は式如・叔蘊、号は雪堂・貞松と称す。清朝末期の官僚であり、考古学者、書家、教育者でもあった。現在の中国浙江省紹興市上虞の出身である。辛亥革命の折

には京都へ亡命し多くの文人と交流した⁽¹³⁾。それらの人物は、円山公園で撮影された羅振玉帰国送別会記念写真からも看取でき、内藤湖南、山本竟山、長尾雨山、富岡鉄斎、犬養木堂の他に濱田耕作らも写っている。羅振玉は山本竟山とも交流が多く、先述の蘭亭会や1913年和漢法書展覧会、1916年大正乙卯寿蘇会、1917年大正丙辰寿蘇会、1918年大正丁巳寿蘇会など多くの会で名前を並べている⁽¹⁴⁾。

この羅振玉であるが、来日の際には大量の図書、甲骨、彝器、明器、古印、古玉などを持ち込んでおり、さらに日本での生活費の工面のために、これらを売却したとの記録が多く残っている⁽¹⁵⁾。このような記録とともに、羅振玉の清朝での立場や浙江省の出身であったことなどを勘案すると、本山コレクションの石鉞は羅振玉から山本竟山を経て本山彦一の下へと渡ってきた可能性は考えられないだろうか。

おわりに

ここまで、本山コレクション中より見出した「山本竟山所贈」石鉞について紹介し、その来歴について若干の考察を行った。また、本資料を介して垣間見た、大正期の文人墨客の交流についても触れることができた。

本資料の来歴についてはいささか推論に推論を重ねた感は否めないが、当時の文人墨客の交流を視野に入れば、あながち見当外れとも言えないのではないかと考えている。羅振玉と最も親交の深かった内藤湖南と本山彦一は、考古学者であり、大阪毎日新聞社京都支局長を勤めた岩井武俊を介しての交流もあったことであろう⁽¹⁶⁾。本山彦一と羅振玉には、自国における農業と教育の発展に注力した共通点も見出すことができる。

今後は、本山コレクションを通して、当時の財界人・文人らの交流を復元することも視野に入れて資料を活用していくことが必要である。

謝辞

最後になりましたが、本稿の執筆にあたり関西大学文学部教授中谷伸生先生、陶徳民先生、関西大学年史編纂室伊藤信明氏、関西大学博物館山口卓也氏、山下大輔氏、施燕氏には多くのご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

註

- (1) 末永雅雄編 1935『本山考古室要録』岡書院
- (2) 関西大学博物館 2010『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』
- (3) 来村多加史 1998「石斧・石鉞」『博物館資料図録』関西大学博物館
- (4) 岡村秀典 2008『中国文明 農業と礼制の考古学』京都大学学術出版会
吉田泰幸 2011「ベトナムにおける先史文化の考古学研究とその資源化に関する研究」『金沢大学文化資源学研究 創刊号』金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター・金沢大学国際文化資源学研究センター
- (5) 浙江省文物考古研究所 2005『反山 良渚遺跡群考古報告之二』北京 文物出版社
林華東 著 金普森・陳剩勇 主編 2005『浙江通史 第1巻 史前巻』浙江人民出版社
- (6) 関西大学文学部教授中谷伸生先生、陶徳民先生のご教示による。
- (7) 狩野直禎 2012「狩野君山とその交友」『書論』第38号
関西大学大正癸丑蘭亭会百周年記念行事実行委員会・関西大学東アジア文化研究センター 2013『大正癸丑蘭亭会百周年記念—近代日本における翰墨の盛典—』
関西大学「山本竟山の書と学問」展示会実行委員会・関西大学博物館 2018『山本竟山の書と学問—湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク—』
- (8) 須羽源一 1973「大正癸丑の京都蘭亭会について」『書論』第3号 書論研究会
- (9) 長尾正和(復斎) 1975「寿蘇会と赤壁会(上)」『墨美』第252号
- (10) 前掲 関西大学「山本竟山の書と学問」展示会実行委員会・関西大学博物館 2018
- (11) 杉村邦彦 1994「楊守敬と日下部鳴鶴—近代中日書法交流史の発端—」『書学書道史研究』4号 書学書道史学会
- (12) 杉村邦彦 1990「楊守敬の来日と日本人書家との交流」『書論』第26号 書論研究会
- (13) 梅溪昇 1992「羅振玉と日本との関係序説—羅繼祖輯述『永豊郷人行年録』を読む—」『鷹陵史学』18 仏教大学
杉村邦彦 2001「羅振玉における“文字之福”と“文字之厄”—京都客寓時代の学問・生活・交友・書法を中心として—」『書論』第32号
- (14) 長尾正和 1974「京都の壽蘇會」『書論』第5号 書論研究会
- (15) 前掲 杉村 2001
- (16) 外山軍治 1965「本会顧問 岩井武俊氏を悼む」『史林』第48巻3号 史学研究会

博物館学芸アシスタント
文学研究科博士課程後期課程在学